

19 世紀パリのスクアール整備に関する一考察

熊本大学大学院 正会員 ○本田泰寛

熊本大学大学院 学生員 毛利洋子

熊本大学大学院 正会員 小林一郎

熊本大学大学院 正会員 星野裕司

1. はじめに

1850 年代からオスマン（Eugène Haussmann:1809-1891）によって開始された都市改造を皮切りに、パリは急速にその姿を変えていった。都市の美化（embellissement）という目的のもとで計画されたこの大規模な工事によって、大通りの開通や上下水道の整備とともに、数多くの公園¹⁾が建設された。

これらの公園の中で最も数が多いのはスクアール（square）と呼ばれるものである。柵で囲われ、植栽や遊具の設置されているスクアールは、今日の私たちが知る一般的な公園として見る事が出来る。都市内の緑化は、パリの整備において重要な目的のひとつであった。ただし、これらのスクアールの中には、もともとは公園として整備される予定ではなかったケースも見られる。

本稿ではまず、パリのスクアールが都市改造に伴って各所に生じた空間的な不整合を調整した結果として現れたものであったことを述べる。また、それらが周辺の状況に対してどのように位置づけられているかを整理し、考察を加える。

2. 公園の分類に見られるスクアールの特徴

パリの都市改造の全体的な指揮をとっていたのは、セーヌ県知事のオスマンである。公園や街路の整備においては、土木技師のアルファン（Adolphe Alphand:1817-1891）がオスマンによって招聘され、設計や施工を担当した。

公園の整備に対しては、敷地面積に応じて表-1 に示す 4 つのカテゴリーが定められた。このうちボワ（Bois）はいわゆる森であり、パリ郊外の広大な国有

林が公園として整備された。パルク（Parc）の中には新設されたものや、私有地であった庭園がそのまま公園として整備されたものがある。これらは現在の地図上ではパリ市内にあるが、当時は市街地の周縁部に位置していた。

一方スクアールは、面積、配置ともにボワやパルクとは異なっている。その特徴を最も良く表しているのは、整備の対象となった場所が、モニュメントのある場所、道路の交差する角地、建築物を取り壊した跡地というように多岐にわたっていることである。

スクアールは、オスマンによる大々的な都市計画によって生じる残地状の空間を整備した結果として出現した公園であった。このような公園整備に対する考え方は、両者が辞任したあとも、後任の技術者によって継承された²⁾。

3. スクアールの役割

スクアール整備のもうひとつの特徴は、敷地内に植樹やベンチを設けて独立した公園とするだけでなく、周辺環境との関係性を配慮することで、改めて都市計画の中に組み直されたものである。そのために、スクアールには、つなぐ、まもる、みせる、という 3 つの役割が与えられた。以下、それぞれについてまとめる。（1）つなぐ

地面のレベル差、道路と建築物、複数の建築物の間に生じた空間をスクアールとするもので、典型的な残地整備の例であると言える。

写真-1 は、スクアール・ランジュヴァン（Square Langevin）をモンジュ通りから見たものである。この場所は、交差する 2 本の通りと、その角地に建つ旧

表-1 オスマンによる公園のカテゴリー

分 類	面 積	所在地	例
ボワ(Bois)	885ha ~ 995ha	郊 外	ブーローニュ、ヴァンセンヌ
パルク(Parc)	8ha ~ 25ha	郊 外	モンソー、ピュット・ショーモン、モンスリ
スクアール(Square)	0.3ha ~ 1ha	都市内	市内に点在

理工科学校校舎によって挟まれた3角形の残地であった。さらに、2本の通りは交差点に向かって下っているために、理工科学校校舎の入り口と地面との間には2m以上のレベル差が生じることとなった。

ここでは、スクアールの中に階段を設けられており、全体が通りと建築物をつなぐような位置づけとなっている。



写真 - 1 スクアール・ランジュヴァン

(2) みせる

建物や周囲の風景を眺めるための視点場としてのスクアールで、建物に対して道路が斜めに通っている場所や、教会の側方や背後に位置する場合が多い。

ノートル・ダム寺院の背後に位置するスクアール・ジャン XXIII は、背後を通る道路と教会をつなぐとともに、教会そのものを眺めることの出来る視点場となっている(写真 - 2)。

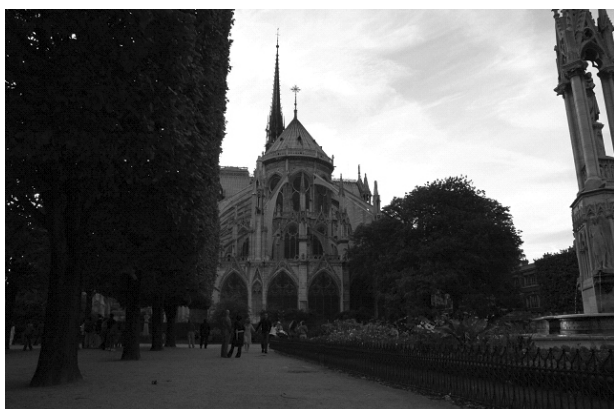


写真 - 2 スクアール・ジャン XXIII

(3) まもる

歴史的なモニュメント(彫像や噴水など)のある周辺が住宅地や商業地となるような場合に、整備とは完全に切り離して歴史的な場所として保護する方法。モ

ニュメントおよびその周辺をスクアールとするもので、緩衝地帯としての役割を持っていたと言える。

1844年に設置された噴水を保存するために建設されたスクアール・ルーヴォワ(Square Louvois)は、このタイプに属する。

4. おわりに

(1) まとめ

本稿では、オスマンの時代に整備されたスクアールを対象として、公園としての位置づけと、建設の経緯を概観した。パリのスクアールは、道路の敷設などによって生じた残地を処理した結果として存在するものであり、敷地単体ではなく、つなぐ、みせる、まもる、という形で、周辺環境との関係性を考慮した処理が施されたものである。

(2) 考察

オスマンによる都市計画とスクアール整備の関係は、図-1のようにまとめることが出来る。都市計画によって生じる無意味な空間は、あらかじめスクアールという形で公園というカテゴリーに組み込まれていた(計画的)。これを「つなぐ」、「みせる」、「まもる」という形で周囲との関係性を持たせ、意味のある空間へと仕立てる(デザインの)ことで、無意味な空間が改めて都市の一部としての意味ある空間へと還元されていった。

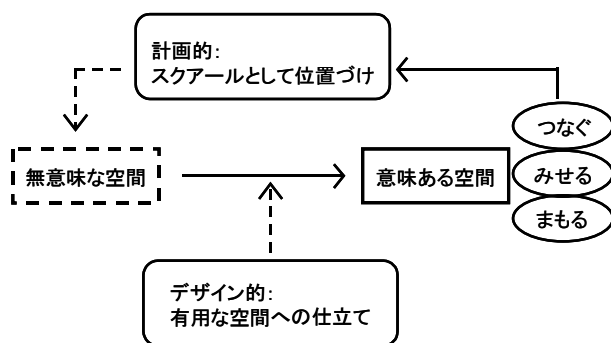


図 - 1 スクアールが整備されるまでの経緯

<参考文献及・注記>

1) H・サーマン著, 小沢明訳: パリ大改造—オスマンの業績—, 井上書院, 1983

なお、本稿ではオスマンによって分類されたボワ、パルク、スクアールを総称して「公園」とした。

2) Domonique Jarrassé: *L'art des jardins parisiens*, Parigramme, 2002